

鑑賞と創作から俳句に親しむ授業のあり方

広島大学附属東雲小学校 谷 栄次

1 実践の趣旨

学習指導要領の改訂に伴い、「伝統的な言語文化」の指導が重視されるようになり、連動して小学校の教科書には古典教材（和歌・俳諧・漢詩・漢文・神話など）や近代以降の文語調の文章が増えることとなった。我が国の文化・伝統にふれることは、子どもたちが国際感覚をもつために極めて重要なことであり、これからの時代を生きていく上で欠かせないだろう。また、これまでの古典学習を省みたとき、多くの中高生が古典の学習に対して苦手意識をもってしまっている実態も伺える。「古典アレルギー」という言葉さえ耳にする状況である。義務教育段階における古典学習の目的は「古典の世界に親しむ」ことにある。この「親しむ」をどうとらえ、具体的に何をどう指導すればよいのかなど、その曖昧さは古典の授業づくりにおける今日的課題といえよう。音読・暗唱ばかりを求められたり、教師から解釈の説明を聞くばかりになったり、そんな授業を繰り返しては、子どもたちと古典との乖離をさらに助長する結果を招きかねない。そこで本論では、俳句を教材とした授業実践を通して、子どもたちが古典の世界に親しみ、確かに豊かな「ことばの力」をつけることができる授業のあり方について考察していくことにする。

－俳句を教材とした学びの系統性についての仮説－

これまで中学校で扱われてきた古典教材が小学校の教科書でも扱われるようになったことは先にも述べた。例えば、松尾芭蕉の代表的な句を小学校3年生、小学校6年生、中学校3年生で教材として学習するといったことも起こりうる。俳句は、小学校・中学校のどの学年においても教材として扱うことはできる。そこで重要なことは、子どもたちの発達段階に応じて何を学ぶのかという「学びの系統性」を明確にしておく必要があるということである。本校では、その「学びの系統性」を表1のように考えている。

表1 小・中学校9年の学びの系統性

Ⅰ期		Ⅱ期		Ⅲ期
小1・2	小3・4	小5・6	中1	中2・3
古典に出会い、楽しむ －内容の面白さを実感する－		古典への興味・関心を広げる －魅力や価値に気づく－		古典にふれる機会を自ら求める －魅力や価値を掘り下げる－
生活経験や具体的な事象との関連の重視		先人のものの見方や考え方との比較の重視		時代背景や生活状況、生き方や価値観の重視
【小1・2及び小3・4】 ○5・7・5のきまりを理解し、リズムに慣れる。 【小1・2】 ○俳句の絵本などを利用して句のイメージを広げる。 ○生活の出来事から俳句を作って楽しむ。 【小3・4】 ○言葉からイメージをふくらませて句の世界を読み取る。 ○季語を入れて生活経験から俳句を作って楽しむ。		【小5・6及び中1】 ○5・7・5の言葉からイメージをふくらませて目に見えない意味や情感を読み取る。 ○できるだけたくさんの俳句にふれる。 ○先人の見方や感じ方を知り、感想をもつ。 ○表現技法（比喻・オノマトペ・とり合わせ・擬人法）の効果を考えて俳句を作って楽しむ。		【中2・3】 ○その当時の生活習慣や時代背景などの歴史的状況を理解し、句の世界と結びつけて深く読み取る。 ○有名な俳人の複数の句を取り上げ、その考え方や感じ方からちがいを考える。 ○言葉への感覚を研ぎすませて、俳句を作って楽しむ。

「伝統的な言語文化」から学ぶことは、今の時代を生活している子どもたちにも新鮮な驚きや発見を与え、様々な価値観を見直し、自分の有り様や生き方を考える機会にもなり得る。

そうした学びの意義や意味が実感できたとき、学ぶ楽しさを感じ、古典にふれる機会を自ら求めるようになるであろう。そのためには、作品に描かれてある世界観や教材の価値の背景となっている歴史的な状況を踏まえることと今の自分の生活や自分に引き寄せて考え、思いを巡らせることを学びの中で行き来することを大切にしたい。

芭蕉の「山路来て何やらゆかしすみれ草」の句を例に考えてみよう。学年による読みの差は、どこに現れるだろうか。「ゆかし（心が引かれる様子）」である。生活経験と結びつけてすみれ草という小さな花の美しさや可憐さ、りりしい中にも和ませてくれる優しさがあることを想像し、作者の感動に共感することは小学校の低・中学年でも可能となる。小学校の高学年や中学校ではどうだろうか。この句を詠んだ芭蕉の旅は、初めての本格的な旅であり、当時の旅が死をも覚悟しての旅立ちであったという歴史的な背景を踏まえると、苦しみや不安の続く旅の途中で、ふと芭蕉が目にしたすみれ草は、自然の恵みや生命の尊さや儂さの象徴とも読める。人知れず山の中で咲いている小さな花の命に芭蕉は自らを重ねて見ていたのかもしれないという読みの広がりも期待できる。

－実践への思い－

芭蕉の句は教材としての価値が高い。芭蕉の句には言葉の意味する表面的なものからその向こう側にある世界観の広がり、心情と結びついた世界観の深まりが感じられるものが多い。「芭蕉は俳諧を芸術の域まで高めた人」と言われるのも頷ける。本来、言葉のもっている役割は、単なる意味の理解や伝達という無味で短絡的なものではなく、その言葉に込められた使い手の思いや感情、その背景としての場面の様子や状況など、ある関係性の中で形として表出される複雑なものである。同じ言葉でも、場面や状況によって微妙なニュアンスの違いが生まれることからわかる。17音という形式で表現される俳句を教材として扱うことは、そうした言葉のもつ特性に気づかせ、言葉のもつ奥深さやすばらしさにふれさせる上で価値がある。

小学校の教科書に取り上げられている俳句の教材は、羅列的・単発的で、句や言葉から季節感を感じさせるものが多い。それでは、俳句の魅力が一面的で、限定されてしまう。子どもたちにできるだけ多くの芭蕉の句と出合わせたい、そして創作・鑑賞活動を通して言葉への感覚を鋭いものに磨き、俳句のおもしろさを実感させたいという思いが本実践の出発点である。また、こうした取り組みは、中学校での「おくの細道」の学習への足がかりになる。

ここでは、Ⅱ期（小学校高学年）における俳句の授業の実践について紹介していく。

2 実践の概要

(1) 単元名「俳句に親しもうー松尾芭蕉、この一句ー」

(2) 単元の目標

○俳句を創作したり芭蕉の句を鑑賞したりして、俳句への興味・関心を高めることができる。
○俳句の鑑賞の方法を理解し、情景や作者の心情などの解釈を自分の言葉で表現することができる。（ここでいう鑑賞の方法とは、名詞に着目し他の言葉と関係づけることにより、句の世界を想像することをさしている。）

○写真をもとに言葉を吟味しながら俳句を作る楽しさを実感することができる。

○5・7・5のリズムに慣れ、そのよさを感じ取ることができる。

(3) 手だて

単元を構想するにあたり大切にしたいことは、次の3点である。

○学校の四季の写真をもとに俳句を創作する活動を取り入れることにより、俳句の学習を児童の現実の生活や今の自分に引き寄せるようにする。

○鑑賞活動の最後に「芭蕉の好きな一句を選ぶ」活動を位置づけることにより、想像する楽

しさを実感できるようにする。

○単元の中でできるだけ多くの俳句を取り上げることにより、様々な側面から芭蕉の句の魅力にふれる機会を増やすようにする。

(4) 指導計画 (全8時間)

第一次 東雲小の風景写真から17音で表現しよう

第1時 ・写真をもとに5・7・5で表現してみる。

第二次 松尾芭蕉先生に学ぼう

第2時 ・松尾芭蕉ってどんな人？ 作者の心情のちがいの比較

第3時 ・色彩の美しさへの着目

第4時 ・対比の面白さへの着目

第5時 ・擬人法の面白さへの着目

第6時 ・学習した俳句以外の句から好きな句を選び、解説文を書く。

第三次 東雲小の風景写真から一句ひねり、句会を開こう

第7時 ・もう一度一枚写真から、鑑賞文を書き、俳句を創作する。

第8時 ・俳句を読み合う「6の2句会」を開こう。

(5) 授業の実際

第一次 東雲小の風景写真から十七音で表現しよう。(1時間)

① 写真をもとに5・7・5で表現し、学習課題を全体のものにする。

6年生の子どもが日頃目にしている、しかも共有できる風景は学校である。その写真をもとに、俳句を試しに創ってみる活動から本単元をスタートした。写真1～4のような校舎と植物、生き物が被写体になっている季節ごとの写真を11枚準備した。その中から写真1枚を選び、5・7・5で表現するようにした。創作するにあたっては、イメージをふくらませるために写真を見て思い浮かぶ名詞をできるだけ多くノートに書かせるようにした。季語については無理に入れなくてもよいことにし、その結果、全員が1作品は創作することができた。



写真1 「春：菜の花」

写真2 「春：藤の花」

写真3 「夏：紫陽花」

写真4 「秋：紅葉」

表2 子どもの作品例

- | | |
|-------------------------|--------------------------|
| ① 庭を見て黄色の床を走る虫 (写真1) | ② 粉をまき人包み込む菜の花よ (写真1) |
| ③ ひらひらと舞いゆく藤は蝶と化す (写真2) | ④ うつむいて立ち直れない藤の花 (写真2) |
| ⑤ 梅雨になりぬれた紫陽花窓越しに (写真3) | ⑥ 満開の紫陽花見ては汗一つ (写真3) |
| ⑦ 見上げれば枝に無数の紅葉の手 (写真4) | ⑧ 夕焼けで真っ赤に染まるもみじかな (写真4) |
| ⑨ あざやかな赤や黄色へ染めていく (写真4) | ⑩ 無数の手夕日をつかむと意地になり (写真4) |

第二次 松尾芭蕉先生に学ぼう。(5時間)

③ 情のちがいの比較 「五月雨を集めて早し最上川」「五月雨の空吹き落とせ大井川」

俳句を創作して特に難しかったことは、「作り方が分からない」というものだった。そこで、「有名な松尾芭蕉がどういう俳句を作ったのかをまず知ろう」と投げかけ、芭蕉の句を学習していくことを告げた。そして、「おくの細道」の足跡を示し、その日数や移動手段を手がかりに芭蕉が生きていた江戸時代はどんな時代だったかを考える場を設けた。句の世界をイメージする上で簡単な歴史的な背景を理解しておくことは必要だと考えたからである。また、俳句の読み方として、1) 5・7・5の中から名詞を見つける、2) 名詞どうしを他の言葉で関係づける、3) 書かれていない様子や作者の心情を想像する、4) 句全体から感じる印象

をまとめる、という4つの観点で書き込みを行い、全体で話し合うという展開にした。

「五月雨」の2つの句については、その共通点と違いを書き込みした後、話し合った。共通点として川の流れの激しい様子が出された。この時間の学習活動で最も大切にしたい活動は、2つの句の違いをについて考えるところである。違いについては、「最上川の方がそれでもおだやか」「五月雨を含んでいる最上川に対して大井川が五月雨を外している」などの考えが出された後、「川を見ている芭蕉の心情に違いはないか」との教師の問いに「最上川は流れの速さに感心している感じがするけど、大井川は『落とせ』とあるからいらだっている感じがする」という意見が出された。また、「最上川の句は心に余裕があるが、大井川の句は余裕がなく芭蕉はまだ若かったのではないか」（創作時期からするとまちがいののだが）というおもしろい意見も出された。

『落とせ』の「せ」の平仮名1文字から心情が想像できること、似ている句でも心情を想像することで句のイメージが全然違ってくことを学習のまとめとした。

④ 色彩の美しさ 「海暮れて鴨の声ほのかに白し」「雪間よりうすむらさきの芽うどかな」

この時間から授業始めに音読を十分取り入れるようにした。前の時間に学習した「最上川」と「大井川」の句、そして学習する「海暮れて」の3句を一斉・ペア・個人と様々な方法で音読した。繰り返し音読することで、5・7・5のリズムを体感することができた。

メインは「海暮れて」の句である。すぐに「5・7・5が5・5・7になっている」という反応があった。これも音読の取り組みの成果であろう。その理由を考えるように投げかけ、前の時間に示した4つの観点を確認した後、書き込みに入った。「静けさの中に鴨の鳴き声が響いている」「『ほのか』から優しい包み込む感じがする」などの意見が出された。この時間で最も大切にしたい学習活動は、「『白し』は何が白いのか」である。「白波」「息の白さ」「鴨の体（腹）」「何もない悲しい気持ち」「むなしい気持ち」の考えが出され、活発な意見交流がなされた。多くの子が気持ちを表現しているという意見に至った。鴨の声が暗い海に響き渡っている余韻を残すためにわざと5・5・7にわざとしていることも出された。その後、「雪間より」の句を提示し、白と薄紫、色のしめる広さを想像し、その違いから受ける印象を出し合った。「冬の中の小さな春が近づいている感じがする」「春が来ていることが強調されている感じがする」「薄紫という色は薄がついているので優しい感じがする」などの意見が出された。

声という色のないものに色をつける表現のおもしろさ、色を付けることで美しさが具体的に想像できるよさを学習のまとめとした。

⑤ とり合わせの面白さ 「荒海や佐渡に横たふ天の河」「ほろほると山吹散るか滝の音」

最初は音読から入ったが、「雪間より」は暗唱できてなかった。板書で示し、話し合っただけなので記憶には残らなかったのだろう。

メインは「荒海や」の句である。すぐに「『荒海』の激しさと『天の河』のゆったり落ち着く様子の対比がよい」という意見が出され「とり合わせ」ということを教えた。前の時間に扱った「海暮れて」の「海」と「鴨の声」、 「雪間より」の「雪」と「芽うど」とも関連づけながら説明した。その後、「『佐渡』をどう考えるか」という教師の問いに、「罪人が流された島」であることから、この句をとらえ直すように働きかけた。「島流しになった人と家族が引き裂くものが荒波で、それでも結びついているものが天の河だと思う」「荒海やで切れ字（前に俳句の学習をしたときに教えていた）だから会いたくても会えない引き裂かれた悲しみが強い」「織り姫と彦星の出会えない七夕伝説と流された人とのつながりを荒海が引き裂いている現実が重なっている」などの解釈が出された。その後、「ほろほると」の句を提示し、「何と何の取り合わせか。そこから受ける印象は。」と問うと、山吹と滝の音から「静と動」、「鮮やかな黄色と透明」「優しさと激しさ・強さ」などの考えが出された。

とり合わせによって、どちらかがより強調される効果が生まれること、その関係を考える

ことで句の世界が深まることを学習のまとめとした。

⑤擬人法の面白さ 「梅が香にのっと日の出る山路かな」「あかあかと日はつれなくも秋の風」

これまで同様、学習した俳句の暗唱から始めた。「ほろほろと」の句があいまいだったが、音読をすることで再度、読み直す場となった。

メインは「梅が香に」の句である。「3月の冷たい朝に温かい太陽が出ている」「山道で暗い中に太陽の明るさが引き立つとり合わせになっている」「ひとり旅をしていて梅の香りが優しく包んでくれる」「梅の香りにさそわれて思わず太陽が顔を出してしまった」などの解釈が出された。これまでの学習と結びつけたことを評価した。子どもたちの発言の中で、『のっと』の意味を『ぬっと』と同じという意見が出された。ここがこの句のポイントと考えていたので、「本当に同じか」との切り返しをした。「『のっと』は軽い感じ、『ぬっと』は重たい粘りがある感じ（紙粘土と油粘土の違いとたとえみんなの納得を得る）」、「『のっと』は速く、『ぬっと』はじわっとする感じ」など微妙なニュアンスの違いについて話し合われた。「あかあかと」では、「季節はいつか」を話し合った。「秋の風だから季節は秋」「日はあかあかだから夏」「夏の終わりで秋の風が吹き始めたころ」など様々な意見が出され、俳句は春夏秋冬を表現しているだけでなく、その変わり目も表現できることに気づいた。

あまり動きが感じられない太陽も擬人法により生き物のようになるおもしろさと工夫により季節の変わり目も俳句にすることができることを学習のまとめとした。

⑥ 学習した俳句以外の5句から好きな一句を選び、解説文を書く。

「夏草や兵どもが夢の跡」「蛸壺やはかなき夢を夏の月」「秋深き隣は何をする人ぞ」「菊の香や奈良には古き仏たち」「面白うてやがて悲しき鶺鴒舟かな」の5句の中から好きな句を選び、解説文を書いた。「夏草」の句9名・「蛸壺」の句7名、「秋深き」の句4名、「菊の香」の句10名、「面白うて」の句6名で、「菊の香」の句を選んだ子が多い理由は、取り合わせがイメージしやすく解説文を書きやすいというものであった。一方で、「秋深き」の句が少ないのは、どう解釈してよいか考えにくいことがその理由であった。その後、ペアになり、互いの解説文を読み、感想を述べ合った。

表3 子どもの解説文例

「蛸壺やはかなき夢を夏の月」

夜、ひっそりとした漁師町の海辺に転がる一つの蛸壺。それはだれからも忘れ去られたようであるが、根気強くまた使ってもらえることを待ち望んでいる。その蛸壺をやさしく見守るように水面にうつった月が波でゆらゆらしている。静かで広大な闇の世界に美しい月の光。その光に照らされうつつらと浮かび上がる小さな蛸壺。何だか心に穴が空いたように空しく悲しい感じがする。

「夏草や兵どもが夢の跡」

今は夏の終わりで草が生えているが、夏の間、戦場になったところでどンドン人が殺されていった。夏草がやさしくやわらかい感じがして、兵がこわくてかたい感じがするとり合わせになっている。夢の跡になったむなしさが心に迫ってくる感じがする句である。

「秋深き隣は何をする人ぞ」

店の前のいすに座っていると道をはさんだ反対側の木の葉がひらひらと舞い降りてきた。ふと隣の人が気になり、この人の職業は何だろう、家族は何人いるのだろうか、結婚はしているのかと考えた。しかし、自分は何も知らない。それが自分の今の世の中の、人に対する関心のうすさなのかとどことなくさびしくなっている。

第三次 東雲小の風景写真から一句ひねり、句会を開こう。（2時間）

⑦ 第一次と同じ写真から鑑賞文を書き、俳句を創作する。

同じ写真で俳句の創作を再度行った。その上で別の写真をもとに句を創作してもよいことにした。

表4 子どもの作品例（表2との比較による作品の変容）

① の花やふと見て気づく背比べ（写真1）	②黄色のや粉舞い落ちる菜の花よ（写真1）
③藤滝や散るははかないちろちろと（写真2）	④だらしない何言われても藤の花（写真2）
⑤枯れていく青紫の涙かな（写真3）	⑥紫陽花や青葉の城に夢飾る（写真3）
⑧ 寒い道紅葉みんなをぼっかぼか（写真4）	⑧紅葉たち日に照らされてルビー色（写真4）
⑨ 手のひらを夕日に向ける紅葉かな	⑩もみじなら私を包んでくれるかな（写真4）

⑧俳句を読み合う「句会」を開こう。

句を全体の場で発表し、一人3句を選び、投票するという方法で句会を行った。

3 児童の反応からの考察

(1) 俳句に対する興味・関心は高まったか

単元前と後で、俳句の鑑賞と創作に対する興味・関心についての児童アンケートを行った。その結果が表5と表6である。

表5 俳句の鑑賞に対する興味・関心の変容

単元後 単元前	興味がとても増した	増した	変わらない	興味がなくなった	合計
とても興味がある	2	0	0	0	2
興味がある	6	4	1	2 ※1	13
あまり興味がない	3	5	5	0	13
全然興味がない	2	3	4	0	9
合計（人）	13	12	10	2	37

表6 俳句の創作に対する興味・関心の変容

単元後 単元前	興味がとても増した	増した	変わらない	興味がなくなった	合計
とても興味がある	2	3	0	0	5
興味がある	3	5	2	2 ※2	12
あまり興味がない	2	4	6	0	12
全然興味がない	1	2	4	1	8
合計（人）	8	14	12	3	37

俳句の鑑賞に興味がないと答えた22名のうち、6名は創作には興味があると答えている。鑑賞に興味があると答えた15名のうち、5名が創作には興味がないと答えている。このことから、俳句の鑑賞と創作とでは、別の活動（別の魅力がある）ととらえている子がいることがわかる。鑑賞・創作ともに（とても）興味があると答えた子のほとんどが単元後も興味が増した・変わらないとしている。※1の2名は「自分の解釈がはずれる」「難しい」という理由であった。※2の2名は「思いつかない」「できない」という理由であった。

単元前、鑑賞に興味がないと答えた21名のうち13名が増したとし、創作に興味がないと答えた20名のうち9名が増したと答えている。これは、一定の成果として考えられる。俳句の鑑賞の奥深さや解釈の多様性が難しさを感じさせたこと、取り上げた俳句の数が多く意欲が減退したこと、創作で満足いく俳句ができなかったことなどの理由から鑑賞9名、創作11名が興味がないと答えている。鑑賞の俳句の数を精選し、シンプルな単元構成にし、解釈の理由に対する肯定的な評価をていねいにしていく必要がある。

(2) 俳句を鑑賞する力をつけることができたか

5・7・5の言葉からいかに豊かに想像しているかが本単元での鑑賞力である。そこで、第二次の⑥の解説文を対象にして表7に示す基準でルーブリック評価を試みた。

表7 俳句の鑑賞力を見取るルーブリック評価

評価基準 (Ⅲ：達成基準)	「菊の香や奈良には古き仏たち」の句の解説文例	評価 (人)
Ⅳ 使われている名詞どうしを他の言葉から関係づけ、想像をふくらませて句の世界観や解釈を豊かに記述している。	自分がしんみりとした気持ちになっているときに、ほのかに菊の香りがつんと漂ってきた。そこには昔から建てられていた古き仏の像が多くある。長い歴史を見てきたどっしりとした仏とは反対に何てちっぽけな人間なのだろうか。そして、自分より前の時代に生きていた人のことを静かに思い出している。	5
Ⅲ 使われている名詞どうしを他の言葉から関係づけ、想像をふくらませて句の解釈を記述している。	多年草で新しく生まれる菊からは軽やかで、次々と生まれるイメージがする。また、色も黄色で美しい。古くからある仏からはどっしりとしていて、色も暗い。その取り合わせから仏をうめつくすような菊の畑が一面咲いている美しさに感動している。	19
Ⅱ 使われている名詞どうしを他の言葉から関係づけ、句の解釈を記述している。	菊の花は秋にいっぱい咲き、奈良・大仏は秋のイメージがある。菊の香りがただよう奈良には大仏があり、その大仏の前にたくさんの菊の花が供えてある。	9
Ⅰ 使われている名詞どうしを関係づけができていない。解釈として意味が成り立たない記述がある。	奈良は歴史の深いところで、菊は秋の季語。だから秋に仏を参りに行くために奈良に行き、菊の香りがだんだんしてきたんだと思う。	4

想像がふくらむ句とふくらみにくい句とがあることがわかった。「蛸壺・はかなき・夢・夏・月」や「夏草・兵・夢の跡」などは、児童にとってイメージがしやすく、関連づけることでまとまった句の世界観が構築しやすい。それに比べて、「秋深き」の句は、難しい言葉はないがそれだけに抽象的なイメージが要求されることになる。秋から紅葉をイメージし、隣の人とどう結びつけるか困ったことが伺える解説文も見られた。解説文を書き、鑑賞の力を評価するのなら、全員が共通の句に対する解説文を書く手段をとる方が適切である。

評価基準のⅡやⅠの子は、言葉を意味だけでとらえようとし、別の言葉で置き換えるだけ、あるいはそのまま言葉と言葉をつなげて意味が通るようにしただけという解説文が多く見られた。「面白うて」の句の解説文を「最初は面白かったが鵜舟を見ていてだんだん悲しくなった」と記述したものがその例である。そうした児童には、一つの言葉を核にイメージマップを書かせたり、他の解説文を読んだりするなどの手立てが必要であろう。

(3) 鑑賞する力と創作する力の関連を図ることができたか

鑑賞したことが創作に生かされたかどうかを見取るためには、第二次で学んだ技法「心情を入れる」「色彩の美しさを考える」「取り合わせを考える」「擬人法を使う」の4つが第三次の創作でどの程度反映しているかを見ればわかる。解説文をもとに判断したものを表8にまとめた。

表8 俳句の鑑賞が創作に生かされたと判断される数

技法	作品例	数
心情を入れる	あめんぼや無音の池を我ゆかん 空の間に消えてたまるか虹の橋 藤滝や散るははかないちろちろと 学校を彩る額縁桜かな	14
色彩の美しさを考える	枯れていく青紫の涙かな 紅葉たち日に照らされてルビー色 紫陽花や青葉の城に夢飾る 黒の空包んでしまえ青の空	5
取り合わせを考える	日の出頃桜の幹にはつぼみだけ 寒い道紅葉みんなをぼっかぼか 果てなき空七色の道虹かける 子どもの実葉がこっそりと守ってる	4
擬人法を使う	菜の花やふと見て気づく背比べ 人来たらはずかしそうな紅もみじ びわの実が怒っているよあかあかと すっと出る虹と共に心晴れ	4
別の技法(比喩)・技法なし	紫陽花や花の世界のわたがしだ 果てしない未来をのせて夏の鳥 宇宙まで輝き続く空の橋 七色のしずくが落ちてできた橋	10

37名中27名が学んだ技法を取り入れた(取り入れようとした)という結果となった。解説文の記述から明らかに学んだ技法が生かされていると判断されるものもあつたが、意図的

でなく偶然そうなったと感じられるものもあった。また、学んだ技法が見られない10名の中にも比喩を取り入れ、意欲的に句の創作に取り組む姿も見られた。創作したい世界を書いた文章から5・7・5で整えた作品にする、その過程の中で言葉を吟味し練り上げる活動にこそ大きな意味がある。微妙なニュアンスの違いを考えたり、より適切な言葉を選んだりといった言葉に対する感覚を磨くことが組み込まれていくからである。安易な言葉のはめ込みにならないよう、表現意図や思いに裏打ちされた表現かどうかを見極め、指導していくことが重要になる。

4 まとめ ー成果○と課題●ー

1○俳句の鑑賞と創作は、別の活動としてとらえている子どもがいる。豊かな鑑賞力＝豊かな創作力とは考えない方がよい。授業で扱う俳句について、ねらいや学習内容を明確にした鑑賞であれば、俳句の創作に活かされることも期待できる。

●複数の俳句を取り上げることで、あきてしまったり、「またか」という飽和状態を生んだりする危険性があることを理解しておきたい。表現技法と関連づけて適切な句を選ぶことが何よりも重要になる。また、句の数が多くなりすぎないように留意する。

2○俳句は、短い言葉でいかに表現するか、短い言葉からいかに想像してイメージをふくらませるかが重要になる。一つの言葉の重みや広がり気づかせ、その結果として俳句に対する興味・関心を高めることにつながった。その際、時代背景や当時の人々の生活についてふれる機会を設けることで解釈の質的な転換を求めることができる。このことは、学びの系統性の仮説のⅡ期からⅢ期への要となる。

●多様な解釈が生む曖昧さから興味を失わせるのではなく、イメージの広がるおもしろさを強調する言葉かけをし、解釈の根拠・理由や児童の生活背景を重視していく。

3○鑑賞にしても創作にしても、言葉を書き出し、比べ、選び、ニュアンスの違いを吟味して適切な言葉を使おうとしている姿が単元を通して多く見られた。このことは、言語感覚を磨き、一つ一つの言葉を大切に作る構えをつくる上でもその意義は大きい。

●ただし、一人一人がどのような思考の流れで最終的な解釈に、あるいは作品に行き着いたのかをていねいに見取っていくことが必要になる。

4○写真をもとに俳句を創作することで、イメージをふくらませるきっかけにすることに役に立った。また、第一次と第三次で同じ写真にしたことは、自らの変容を自覚する場となる。同じ写真でも様々な俳句ができることは視点のおもしろさに気づく意味でも学習を活性化することができる。

●季語の扱いは課題が残る。どの言葉が季語なのかの判断の難しさや季節感のずれ（例えば朝顔は秋の季語）は、創作する上での大きな壁となる。言葉と季節を示した季語の一覧を準備するなどの工夫をしたい。条件を示すことが思考を固める要因になったり、活動に窮屈さを生んだりしないように配慮したい。

【参考文献】

- 有馬朗人・宇多喜代子監修、『松尾芭蕉この一句 現役俳人の投票による上位157作品』、平凡社、2009。
尾形侑編、『俳句の解釈と鑑賞事典』、笠間書院、2000。
外山滋比古、『省略の詩学俳句のかたち』、中公文庫、2010。
須田実編、『俳句に見る日本人の心ー人間観・自然観・社会観の育成ー』、明治図書、2009。
田中洋一、『小学校古典指導の基礎・基本』、図書文化、2011。
日本言語技術教育学会、『言語技術教育19「伝統的な言語文化」を深める授業力とは』、明治図書、2010。
全国大学国語教育学会編、『国語科教育学研究の成果と展望』、明治図書、2002。
難波博孝・東広島市立原小学校、『伝統的な言語文化の授業づくり』、明治図書、2009。